



2013年10月15日 発行

2013年秋号

<第24号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/下野英世 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 works-union@y3.dion.ne.jp http://www.v-aid.org/union/

THIRTYVINTY

エルチャレンジで、中央区役所や西屋内プールの掃除をしましたね。モップ拭きや手すり拭きをしましたね。朝早いでしたね。

それから、就職して大阪府立急性期・総合医療センターで働いていますね。

休みの日は、ヘルパーさんと一緒に映画に行きます。

ダンス教室にも通っています。月に二回、土曜日に通っています。ストレッチで体を動かしました。ペアでもストレッチをしました。曲をきいて、先生の動きを見て一生懸命踊っています。

ホップステップが難しかったです。

十二月にある発表会に向けて、月曜日の練習が始まりましたね。

みんなと一緒に夕食のお弁当を食べてから練習しています。練習は大変だけど、楽しいです。もつとたくさんの踊りができるようにしたいですね。

笹山 和義

生活介護事業所 和

それぞれの営み

「和」は、「ワークス田積」時代から長く事業をしてきた生野区の「ワークス和」を離れ、平成二十五年三月に西区に引っ越してきました。

事業形態も、移転を機に就労継続支援B型から生活介護に変わりました。現在、男性十名、女性三名の計十三名の方が利用しています。自閉的な傾向がある利用者さんが多いことも特徴の一つです。今回は、移転してからの「和」の様子を紹介したいと思います。

地下鉄西長堀駅や阿波座駅から徒歩十分、穏やかな住宅街や公園を抜けた先に見えてくる青い看板。ガラス扉を開けると白い壁紙と作業場が広がっています。改装して新しくスタートしたこともあり、きれいな部屋に明るい光が入って、新しいものが好きな皆の気分も明るくなったようです。

和の作業場では、以前と変わらないカチカチという金属音が鳴っています。作業は金物製品が主で、ナット巻きやパッキン貼り等の種類の違うものが数十

種類ほど入ってきています。

作業時間になると、我先にと部材に集まる利用者さんたちが、慣れた手つきで作業を進めます。部材が少なくなってくると、なおさらその取り合いに火がつくほど、作業に張り合いを持っている利用者さんも多く、意欲的に取り組んでいます。

自閉的傾向がある一部の利用者さんの中には、嫌いな作業が回ってくると途端に機嫌が悪くなる人や、同じ作業を黙々とすることで落ち着いて過ごせる人がいます。職員は、利用者さん

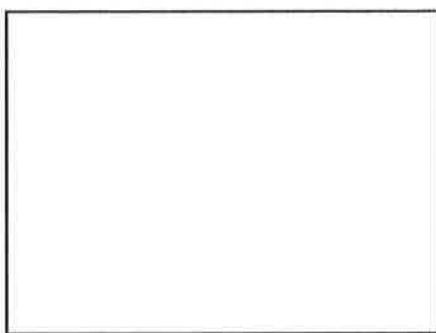
の希望や適性、日々の表情などを見ながら作業を回しています。

作業の他には、毎週一回、講師の先生にストレッチとダンスを指導してもらっています。身体を動かし、リラックスできる時間です。移転を期にダンス曲もリニユールして、苦戦しながらも楽しんでいきます。他に、フアシリテーション

ボールの活動も、月に一回程度の頻度で取り入れていこうとしているところですが。皆とてもリラックスしてボールに背中を預けていて、普段は背筋を伸ばす機会が少ない方や身体に力が入りやすい方等にとっても、心身が元気になる活動ではないかと思えます。フアシリテーションボールは、講師の方を招いての活動日の他にも、日々の休憩時間等の中でも取り入れていきたい活動の一つです。

現在、他に定例で行っている活動は、月に一度の食

事会、看護士さんのバイタルチェック。月に二回程度の図書館活動。他に希望者に対して個別にボールの活動をしています。春の野外活動や十二月のクリスマス会も定番です。



休憩時間には、音楽やダンス、インターネットを楽しむ人、職員と一緒に公園に走り行く人やキャッチボールをする等があります。

思い思いにやりたいことを選んでいるようですが、そのきっかけを作ることや、それぞれが「楽しい」と感じながら日々継続していくには、職員の役割は大切に

なっています。一緒に楽しむ人がいます。一緒に楽しむ人が

いると、利用者さんもいつもに増して楽しそうです。

引っ越しをしてから、とても明るくなったAさんがいます。これまでは周りの声に気になってしまい、一人で作業をすることが多かったのですが、移転後は作業空間が変わったこともあってか、職員と話しをすることが増え、自分の思うこと、やりたいことを話してくれる機会が多くなりました。最近では、次の個人活動でどこへ行こうかと、図書館で借りてきた関西ウォーカーなどを見ながら考えられている時間が、夢を膨らませる楽しい瞬間です。

日々の中でそれぞれの時間をどう過ごしてもらおうか。それを彼らにとつての日常の、ひいては人生の充実にどう繋げていくか。

これからも「和」では、働くことを続けながら、個々に合った支援を考え続けていきたいです。(原)

自分らしい生活

障害者差別禁止法ができて一年。この機会に、日常の支援を振り返ってみる。

自分自身、改めて考えた事が無かったが、自分らしい生活とはどんなものなのだろうか。特にドラマチックな展開もない、いたって平凡な生活を送っているが、自分で住む場所や仕事、食事等を選んで生活していることは自分らしく生きていく事になるのかもしれない。

自分が「こうしたい、こうなりたい。」などの自分の思いを他者に伝えることが難しかったり、経験がない事に不安があり、自分から新しい一歩を踏み出すことが難し人が多いと、利用者

と関わる中で感じてきた。そういった利用者に対して本人の思いをくみ取り、こちらから色々な選択肢を提案したり、一緒に新しい事を体験できる機会を作る

ように心がけている。

「自分はこのままでいいんだ。」と本当に思っている利用者に対して、それを無理矢理変えるような支援は、支援者としての思いや価値観の押し付けや自己満足になってしまう。

しかし、利用者の言葉だけを鵜呑みにするのはなく、どういった人生を歩み、どういった経験を今までしてきたのか、本人が本当に求めている事は何かをそれをしつかり向き合って関わっていく中で見極めなければならぬ。

職員は「このままでいい。」「やりたくない。」「好きじゃない。」という利用者の言葉に対して、「じゃあしようがない。」と簡単に境界線を引いてしまっているだろうか。今よりも未熟だった自分はそういった判断をした経験がある。「自分らしく生きる」という意味を履き違えていたのかもしれない。

利用者との適切な関係性

や距離が一人ひとり違うことは当然だが、同じ利用者に対しては日中と生活という支援の場が変わることで、また違ってくるだろう。トータルな支援を行っているユニオンはその場その場できめ細やかな配慮が出来る環境だと思いが、介入しすぎず、放置しすぎず利用者が「自分らしく生きる」ことができる支援を今後も考えていきたい。(横田)



ワークスユニオンは地域生活と就労を支えることを掲げています。地域生活の話題がでると、よく自分らしい生活を、と耳にします。よく考えると地域で暮らすことは制限されている事が多く感じます。となると、自分らしく暮らすとは趣味や好きなことを増やす、それでいて地域でゆとりをもつて暮らすことなのかもしれない。

私は4月より生活担当として利用者を支援しています。一時的なレスパイトの場合とは違い、ずっとその場所で生活している彼らの生活には個性が感じられ

ます。Aさんは収集癖がありま

す。自分の部屋に好きなチラシをたくさん持ち込みます。その為部屋はチラシで溢れています。特段してはいけないことではありませんが、自分の生活に色をつけていくことは当たり前の行為です。本人の生活のリズムが乱れる程にならないければそれで良いのではないかと

思っています。しかし地域で生活にするにあたり周り近所から迷惑だと思われる事や苦情が出るような恐れがあれば、その人の地域生活を続けられなくなるため、改善しなければならぬと考えています。しかし、職員がその人の生活に介入することによって、監視さ

してしまう。このような支援はしたくはありません。それゆえ利用者との距離感や関係性はとても大事で、どこまで介入していいのかで苦慮します。

例えば、チラシが増えすぎて、普段着を入れる場所が開かない。筆筒にもチラシが入っている為片付けられない。捨てるのは簡単ですが、本人にとっては大切な物です。だから本人が居るときに一緒に片付けますが、数が膨大過ぎることがあり一向に進みません。その為、本人と話して昼間職員側である程度片付けるようにしますが、果たしてそれでよかつたのかといつも考えてしまいます。

職員それぞれに関わり方、関係の作り方、考え方が様々です。職員の考えの押しつけや自己満足にならないように、相手の立場に自分を置き換え、常日頃より深く考察し、利用者本位の支援をしなければならぬと考えています。(高村)



省している。

痛みがだいぶ和らいだ頃に家内は、「原因の大元は酒とタバコにあるんでしよう。

私も、好きなお酒を止めるから、あなたも酒とタバコを止めなさい。」と一方的に主張しました。

酒もタバコも身体によくはないのは、重々承知しているが、止められない。

家内が私の身体のことを心配して言っているのは分かるが、何度も言われると「私の人生や、好きに生きさせろ。」と叫びたくなる。

六月になった頃、急に首筋に激痛が走り、とても仕事のできない状況が続いた。原因は、胸鎖関節に何かが感染し炎症を起こしたためだったのだが、整形外科や整骨院をはしごしても、十日以上痛みは、一向に治まらず、本当に閉口した。

家内に着替えを介助してもらっても激痛が走る。心の中では、「お前、ヘルパーの資格も持っているんだからもう少しやさしく介助しろよ。」と思うのだが、手伝ってもらっている手前、文句も言えない。

利用者の事を思う支援者の「ご尤もな一言」も度重なる時、利用者や利用者家族を傷つけてしまう。「分かっちゃいるけど止められない。」そんなものを誰しも持っている。それが人生！

私は、利用者によく正しい生活を求めるつもりは更々ない。それより、彼らの「自分らしく生きる」を守り続けたい。

職員紹介



山本 理沙 (をーメン)

ユニオン職員の最年少、常に人生とは何かと思案し、愛を求めているという感受性豊かな22歳。幼い頃から描画に親しみ、高校は美術科に通いましたが、自由に描きたいという気持ちからその道には進みませんでした。

小説を書くことも好み、感情が高まると筆を走らせませす。内容は人様には言えないとのことなので、ご想像にお任せします。若いながらも些細なことに気づける細やかな一面を持っており、利用者と共に悩み、支援を通して

て自分をも見つめながら歩んでいる日々です。今後も様々な経験を積み、たくさんの愛に出会えることを祈ります。

大野 弘策 (をーメン)

何事も前向きに捉え、「攻めの人生」をモットーに、これまでに営業マン、木こり、福祉と、物怖じすることなく異色の世界に挑戦してきました。休日にはスノーボードや釣りに勤しみ、休日が明ける度に小麦色を通り越す程黒くなっていく姿が見られます。

ワールドに見えて、実は女性職員よりも女子力の高い彼。いつも焼けた肌にクリームを塗りこみ、良い香りを放っています。目的に向かって進み、達成していくことが好きだと話しますが、ゴールの見えないこの仕事の難しさを感じながら、利用者の喜びを探し続けます。

(野々村)

榎原さん、おめでとう！

十月に東京で行われた全障害者スポーツ大会で、ワークス集の榎原みゆきさんが、六度目の挑戦で成年女子の部で優勝しました。メダルと笑顔が素敵ですね。

編集後記

▼異常な猛暑も落ち着き、一気に秋がやってきました。▼今年のユニオンは、スポーツの秋の話題が豊富です。風船バレー関西大会の出場和のファシリテーションボールの導入、ダンス発表会に向けての猛練習、そして、榎原さんの全国大会優勝。▼どの活動でも、利用者さんの活き活きした表情に、発見も多い秋です。(S)